2019 6

いま欲しい！　超・最新世代の88点

「令和」元年、10万円でアートを買おう！

月刊美術
No.525
Since 1975

諸星美喜　ちらり

Art Topics アートトピックス

現代日本の美術の粋を集める創と造2019 開幕

創と造2019の会場風景。熱心に作品に見入る来場者

工芸と彫刻のコーナー

会場の東京美術倶楽部エントランス

美術品の購入の場といえば百貨店や画廊街のギャラリーのほか、オークションやアートフェアが一般的。

五都美術商連合会主催の「創と造」は、いわば美術商が認める作家の新作を美術ファンに推奨する大規模な作品展。日本画・洋画・工芸の分野で活躍する現代作家に、美術商が直接新作を依頼し、全国5カ所に巡回。すべての作品は入札制で購入が可能で、落札価格が作家の人気のバロメーターとなっているため、注目度は高い。

4月22日、その皮切りとなる東京展が新橋の東京美術倶楽部でスタートし、134作品を堪能しようと多くの来場者が詰めかけた。約一ヶ月をかけて大阪・京都・名古屋・金沢を巡回し、5月には再び東京に戻って展示する。現代日本の美術の粋を感じた方も多いはず。落札概要は7月号で発表予定。

■創と造2019巡回日程

名古屋美術倶楽部（5／21～23）、東京美術倶楽部（5／25～28）

Art Topics アートトピックス

エコール・ド・パリの作家紹介を中心に半世紀 開廊50周年を迎えたギャルリーためなが

4月20日に行われた祝賀パーティには創業者の爲永清司氏（右）の姿も

コタボ、ギアマン、ワイズバッシュ、フサロの画業を見つめる『画廊と共に歩んだ4人展』を開催中のギャルリーためなが（東京都中央区銀座7-5-4　☎03-3573-5368）

東京・銀座のほか、大阪、パリにも拠点を構える美術商大手のギャルリーためなが（爲永清嗣・代表取締役社長）。同画廊は1969年の創業以来、モディリアーニ、ヴァン・ドンゲン、キスリング、シャガールらエコール・ド・パリの作家たちを中心に、フランス近現代絵画の優品を日本国内に紹介、西洋美術への理解と普及に尽力してきた。その歩みは今年50年という節目を迎え、4月20日、関係者の列席のもと祝賀パーティが開催された。

会場にはエコール・ド・パリ同様、1970年代から一貫して紹介し続けてきたフランス現代具象作家、ベルナール・ビュッフェ、ラウル・デュフィ、ジャン・ピエール・カシニョール、アンドレ・コタボ、ポール・ギアマン、クロード・ワイズバッシュ、ジャン・フサロらの作品が一堂に。また、一連の作家たちを見出してきた創業者の爲永清司氏（現・会長）も元気な姿を見せるなど、華やかな雰囲気に包まれた。

なお、ギャルリーためながでは、現在、開廊50周年記念の一環として『画廊と共に歩んだ4人展』を開催中（6月16日まで）。今後は、近年力を入れる欧米、アジアの新鋭作家の紹介にも期待が集まる。

▼54ページに関連記事掲載

ひと

ギャルリーためながが会長
爲永清司さん

ためなが・きよし
1932 年生まれ。69 年日本で西洋絵画の名匠を扱う画廊として「ギャルリーためなが」を開廊。71 年セーヌ右岸に日本の画商として初めてパリに開廊。2019 年開廊 50 周年。

現代フランス具象絵画を世界に発信

インタビュー：家名田馨子

今年50周年を迎えたギャルリーためながは、日本を代表する大画商であり、自らジャズピアノや花を嗜む洒脱な文人・爲永清司現会長により、1969年西洋絵画を扱う画廊として銀座で創業。彼は遡ること1950年代から渡仏を重ね、パリで大画商ポール・ペトリデスやベルナール・ビュッフェと出会って交友を広げ、開業の2年後には、日本人として初めて、パリにも画廊を開きます。

折しも日本は、1959年に国立西洋美術館が開館し、近代西洋美術鑑賞の礎を築いて10年余り。印象派の巨匠の名画はすでに欧米の美術館やコレクター所蔵であった当時、爲永氏は、注目を集めていたエコール・ド・パリの、モディリアーニ、ヴァン・ドンゲン、キスリング・シャガール、スーティン等の名品に着目し、やがて名匠となる彼らの優れた作品を、国内の美術館や収集家の元に納めて日本に招来します。一方で、まさにパリで筆を奮う才能溢れる画家、アイズピリ、コタボ、ギアマン、ワイズバッシュらを見出し、熱くパトロナージュ。二人三脚で時を重ね、現代フランス具象絵画を代表する作家に育てあげ、世界に発信し続けてきた業績は、高く評価されています。

1970年代より、パリ右岸の画廊街マティニヨン通りから、ロマン溢れる美の物語を紡ぎだしてきたマエストロ・爲永清司氏にお話を伺います。

「パリの日本人」のパイオニアとして

――1950年代のパリは、いかがでしたか。

「なにしろ、初めて暮らした57年ごろは、パリに行くのにも大変な時間がかかり、日本人なんて誰も来ていない時代。ガイドブックもなく、初めはシャンゼリゼがパリそのものだと思っていたくらい。美術商が集まっているエリアを、自分で見て歩いて探そうとして、半年くらいかかりましたよ。でもそうすることで、パリの街やパリらしい感性が、自ずとわかってきたのです」

――1970年代初頭に客員教授としてパリにいた父から、当時の御高名を子供の頃に聞いておりました。

「いや、当時パリの人は日本を知らなくて、ソルボンヌ大学の教授にすら『日本でもメトロは走っているの?』なんて尋ねられてね。東洋のアイデンティティをなんとかアピールしなきゃと、紋付羽織に袴姿でシャンゼリゼを歩いたんです。すると地元フィガロ紙が面白がって私の写真を記事にしたので、ちょっとした有名人になったんですよ」

――二十代半ばで、世界に冠たるパリの画壇の輪に入っていかれるのは容易でなかったのでは?たとえお金を積まれても、良しとしないものは、絶対許さない気質も当時はあったでしょうから。

「ええ。ところがベルナール・ビュッフェのヴェルニサージュなどで、絵の前で紋付羽織袴姿で佇む私の記事が出回ると、パリで『オモシロイ』と持て囃され、しかも私が美術関係を志していることが伝わると、著名な画廊からヴェルニサージュの招待状が届き始めたんです。『かたち』が面白い若造の私を、パリの大画商たちが大切に迎え入れてくれて、多くの得難い出会いがあったんです。当時の駐仏大使にすら届かないモディリアーニ展の招待状が私に届いて、大使ご機嫌斜めでしたよ」

――パリのプレス記事が画壇へのパスポートに?

「まあそうですね。ジャコメッティにも、『フィガロ紙に紹介されていたのは、君か!』なんて言われて、握手したときのグニュっとした手の感触はいまも残っていますよ(笑)。互いに『面白い異人さん』として友情が生まれ、彼は私を通して『東洋の神秘』を知ろうとしたのかもしれません」

――ビュッフェとはご交流が特に深く、彼の絵のアジアでの販売独占権をお持ちだったとか。

「最初は、彼が東洋人の私に興味をもったんです。抽象絵画一色の当時のパリにあって、唯一の天才具象作家。鋭い線が印象的な画風のように、近づきがたい神経質な感じでしたね。ただ私とは同年代で親しみがあり、彼はいつもニコニコしていましたよ。滞在先に用意した帝国ホテルのスイートでは、大好きな相撲を夢中で観ていました。会食は好きで家にやってきては『おさしみ食べたい』とかいってね。街を眺めて土地の美味しいものを食せば、文化が一番わかりますから。1か月くらいの滞在なのに、ルイ・ヴィトンのスーツケース13個、ネクタイも百本以上、エスプレッソ・マシンまで持参でいつも大荷物でしたよ!」

ギャルリーためなが
東京都中央区銀座7丁目5-4
☎03(3573)5368
http://tamenaga.com
※「画廊と共に歩んだ4人展」を開催中(～6/16まで)

美しさの原点

――日仏の感性は通じ合うものがあるでしょうか。

「美しいものや感性は、『それぞれ』ですね。日本は『今日はお天気』とか、『雨が降ってる』という。一方パリの人は、『今朝の光はきれい』と、モンマルトルのマルシェのおばさんが自然と口にする。しかも彼女の胸元には、さりげなく絶妙に似合うスカーフが巻かれていたり。また風景がきれいなだけでなく、『典型的人物』が美しく、しっくり絵にはなりますね。マルシェの野菜も色彩や風合いまで互いに映えるよう、調えられて積まれている。彼らは『光』を知っているんです。印象派の絵画がフランスで生まれたのもよくわかりますね」

――会長の慶應義塾大学文学部美学専攻時の卒論タイトルは、『セザンヌ否定論』であられたとか…。

「私は大きな流れに抵抗するところがあるんです。明治以降、日本は西のものを無条件に礼賛する傾向がある、それが気に入らなくてね。当時はむしろ東洋美術に興味があり、東洋のいいものを紹介したい願望は、昔から変わらずもっています」

――契約される画家は、やはり具象が中心ですか。

「手が動かなければダメだと思うから、いまだにデッサンはさせます。抽象はただ色をくっつければアートというけれどね。ビュッフェに1メートルくらいの線を描かせると、まっすぐひけました。20人の作家に線を描かせても、誰のものだか私にはわかります。画家の個性が宿っていますから。ルノワールの鉛筆、ボナールの鉛筆とね…」

パリの画商の伝統

――パリの画商たちから影響をうけたことは?

「日本の場合、画商は、画家のアトリエから、作品を一本釣りで選んでもっていく。ところがフランスの場合は、画商は興味をもった画家と丸ごと契約する、つまり結婚するような関係を結ぶでしょう? このやりかたに興味が湧いたんですよ」

――生前のアイズピリ氏に、初期のペーソスの利いたアルルカンの作品から、光や透明感を纏い、モダンで軽やかな作風に推移した契機を尋ねると、会長がよくアトリエを訪れられ、アドバイスを授けられたエピソードをいろいろ伺いました。

「ええ。あるときも彼が辛い経験をして、心はグレーで絵も暗くなった。北へと向かう彼を制し、2、3か月ヴェニスに滞在するよう勧めました。すると絵にゴンドラが現われ、画面もみるみる明るくなりました。これも画商の役割ですよ」

――『これが面白い!』と確信なさる、確固とした審美眼をお持ちですね。どのようにして?

「絵画に限らず、織物でも焼き物でも瀬戸物でも、私はきれいなモノに興味があった。各ジャンルの一番美しいものだけを見るんです。そして自分が本当にいいと思うものを見つけたら、間違っているかもしれないけれど、信じ込んで紹介するのが画商。またなにげないところで見かけた、名も知らない美しいものを、とことん調べて探し出して、世に送り出す執着心も、とても大切なんです」